

「彼にふさわしい助け手」

2005.7.31 赤羽聖書教会主日礼拝説教

15. 神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

16. 神である主は、人に命じて仰せられた。

「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

17. しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。

それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

18. その後、神である主は仰せられた。

「人が、ひとりでいるのは良くない。

わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

19. 神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、

それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。

人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。

20. こうして人は、

すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。

21. そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。

それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

22. こうして神である主は、

人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

23. すると人は言った。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。

これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

24. それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

25. そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

説教

神さまは、人を造られた時、「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」と言われて、男のために「助け手」をお造りになります。それが女でした。ここにとても重要な真理が啓示されています。すなわち、女性というのは、本質的に男の助け手として造られたということです。このことは、女、男それぞれの生き方を考える上でとても大切なことです。神さまは、女を、男を助ける「助け手」として造られたのです。男を「助ける」という目的のために女性を造りました。そして、同時に、そのための能力、つまり男を「助ける」能力を、女にお与えになりました。そのような者として女は造られたのです。ですから、本来、女が、その持てる実力を最大限に発揮する時は、男を助ける時です。女が男を助ける時、女は自分の持つ能力を最大限に発揮して、神の栄光をあらわすことができるのです。

このことは、必ずしも女性の地位を低めたり卑しめたりするものではありません。聖書の教えは決して女性の地位をいたずらに低め

たり蔑視を助長するようなものではありません。むしろ、歴史を見ると、「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」「奴隷も自由人もなく、男子も女子もない」（ガラテヤ 3:28）こう説いてきたキリスト教会ほど女性の地位向上のために貢献してきたものは他にありません。その聖書が、女性の地位と役割について、女性が男の「助け手」であると教えます。神さまは、男を「助ける」ために女を造り、そのための能力、すなわち男を「助ける」能力を、女にお与えになったと言うのです。女性の自立ということが、教会の内外でしきりに主張されます。確かに、女性が男に依存して生きるということは聖書の教えるところではありません。「地上のすべての民族は、**あなたによって祝福される**」あなた以外の誰かによってではなく、「あなたによって祝福される」これが聖書の教えです。ですから、自分が男を幸せにする、というのではなく、自分が男に幸せにしてもらう、というような、男に依存して生きる生き方は、結局、男も幸せにすることはできないし、自分も幸せになることはできません。だから、女は自立すべきなんです。男に依存せずに自立すべきなんです。キリストにあって、自立すべきです。夫に愛される愛されないは関係なく、神さまに愛され、生かされているという信仰の上に、しっかりと自立すべきです。しかし、だからといって、つまり、自分は男から自立したということで、それじゃあ、男よさらばとばかりに、男と何ら関係のない生き方をすることを聖書は教えていません。むしろ、男と正しく関わるよう教えます。すなわち、男の「助け手」となるよう、男の「助け手」として生きるよう教えます。「自立」との関わりで言うならば、女は、男に依存することなく、キリストにあって自立をしながら、男を助ける、それが聖書の教えるところです。

それでは、男を助ける「助け手」とはどういう意味なのか、具体的に見ていきましょう。まず、神さまは、「わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」と言われます。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」（創世記 2:18）

この「彼にふさわしい」と訳されている言葉の意味は、「彼の目の前にいる者のように、差し向かえの、一对の、一組の 極めて親密な、彼にお似合いの、相応しい」というような意味です。つまり、男自身の目の前に差しで、しっかりと向き合って、そこに誰も割って入る余地のない、極めて親密な、一体的な存在として、女を造ろうと神さまは意図なさったのでした。上を見ると、神さまがおられます。下を見ると、自分の治めるべき被造物が無数に存在しています。つまり、上からは、上司の神さまから日々命令が下されます。そして、下には、営業取引先の商売相手がいくらでも待っています。だから、自分一人では、毎日毎日ただ黙々と命令された仕事をこなすだけで、「大変だね。」とその苦勞を労ってくれる者がいません。自分の苦勞や一緒に担ってくれる者がいないんです。それに、たとえその日の仕事がうまくいっても、それを一緒に喜んでくれる者がいません。恵みを受けても、誰も分かち合える者がいないです。一緒に重荷を担い、一緒に考え、一緒にヴィジョンを共有し、一緒に恵みを分かち合って、一緒に喜んでくれる者が誰もいないんです。そして、それは、犬や猫じゃだめなんです。20節にはこうあります。

「こうして人は、

すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。」

だから、神さまは女を造られたのです。「いつも男のすぐ目の前にいる者」として、女を造られました。「男の上にも下にも位置しない、男と全く平等の、対等の存在」として、女を造られました。「一对の、一組の、極めて親密な者」として、女を造られました。「彼にお似合いの、彼に相応しい助け手」として、女を造られたのです。

それでは、「助け手を造ろう」と神さまが言われる「助け手」とは、一体どういう意味でしょうか？聖書が「助け手」という言葉を使う場合、それは何か劣った存在を指している箇所は一つもありません。むしろ自分と対等か、あるいは自分よりも優れた能力を持っている者が「助ける」場合に、「助け」という言葉を使います。例えば、戦争に於ける助け、いわゆる援軍、自分の味方を指す場

合です。1 Ki. 20:16「彼らは真昼ごろ出陣した。そのとき、ベン・ハダデは**味方の**三十二人の王たちと仮小屋で酒を飲んで酔っていた。」また、危機からの助けを意味する場合にも使われます。2 Ki. 14:26「そこには、奴隷も自由の者もいなくなり、イスラエルを**助ける者**もいなかった。」落胆、失望、悩み、貧しさ、虐げ、暴虐からの助けも意味します。Ps. 72:12「これは、彼が、助けを叫び求める貧しい者や、**助ける人**のない悩む者を救い出すからです。」保護し、弁護し、守り、養うという、生活の全面保障・全面的な助けも意味します。Job 29:12「それは私が、助けを叫び求める貧しい者を助け出し、**身寄りのない**みなしごを助け出したからだ。」苦難、滅び、飢饉、死からの救い、いのちを救う助けも意味します。Psa 70:6「私は、悩む者、貧しい者です。神よ。私のところに急いでください。あなたは私の助け、私を救う方。主よ。遅れないでください。」Hos 13:9「イスラエルよ。わたしがあなたを滅ぼしたら、だれがあなたを助けよう。」悪魔、神に敵対する者からの助け、「罪と滅び」からの救い・助けも意味します。「神のことばに逆らい、いと高き方のさとしを侮る」ことと、そこから来る神のさばき、すなわち神のさばきを受けて「やみと死の陰に座し、悩みと鉄のかせとに縛られる」ことからの助けです。「それゆえ主は苦役をもって彼らの心を低くされた。彼らはよるけたが、だれも**助け**なかった。」Ps. 107:12

そして、このことは、誰より神さまのことを表現する際に多く使われます。「**もうひとりの名はエリエゼル。それは「私の父の神は私の助けであり、パ口の剣から私を救われた。」**という意味である。」（出エジプト記 18:4）「神は私の助け」である、私たちの最大の「助け手」は、神さまなのです。「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。...私たちの助けは、天地を造られた主の御名にある。」（詩篇 121:1,8）

「幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は。」（詩篇 146:5）

「イスラエルよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの**助け**、また盾である。」Psa 115:9

これが男の「助け手」である女の働きの全貌です。その働きは、一言で言えば「神の助け」なのです。男は、神と共に、（この世界を治めるといふ）神の働きをしますが、女も、やはり神と共に、（男を助ける）という神の働きをなすのです。男がしっかりと神の働きをなして神の栄光をあらわすよう「助ける」のです。男の働きは間違いなく神の働きですが、しかし、（男を助ける）女の働きも、間違いなく神の働きなのです。しかも、男がしっかりと神の栄光をあらわすよう「助ける」という、極めて大切な働きなのです。男の「補助」というよりは「助ける」んです。男が神の栄光をあらわすよう「助ける」んです。チョコチョコ「助ける」んじゃなくて、「全面的に助ける」んです。「何もかも助ける」んです。慰めたり、力づけたり、励ましたり、引き締めたりして、「助ける」んです。「助け」という言葉の動詞形のほとんどの訳は、「力づける」という意味です。Jer. 1:17「さあ、あなたは腰に帯を**締め**、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く。」これは「帯を締める」際に使われますが、古代の競技「ベルト・レスリング」にちなんだ言い方だと言われます。（相手を倒して、その腰の帯を奪って勝負をつける競技 = だから、取られないようにしっかりと帯を締める）

1 Sam. 2:4「勇士の弓が砕かれ、弱い者が力を**帯び**、」

2 Sam. 22:40「あなたは、戦いのために、私に力を**帯びさせ**、私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させました。」

Job 38:3「さあ、あなたは勇士のように腰に帯を**締めよ**。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。」

Job 40:7「さあ、あなたは勇士のように腰に帯を**締めよ**。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。」

Ps. 18:32「この神こそ、私に力を**帯びさせて**私の道を完全にされる。」

Ps. 18:39「あなたは、戦いのために、私に力を**帯びさせ**、私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させました。」

Ps. 30:11「あなたは私の荒布を解き、喜びを私に**着せてくださいました**。」

Isa. 45:5「わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。」

あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。」

Isa. 50:11 「見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。

これらの意味は、これから戦う者に、戦う力を与え、喜びを与え、祝福を与え、燃える心を与えて、奮い立たせ、身を引き締める、といった意味です。

「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記 2:18) 神さまがこう言われた時、このような神さまの助けを神さまに成り代わって男に与えることを想定し、意図して、女を造られたことは、間違いありません。それは、男の力強い味方をします。落胆、失望、悩みを和らげます。苦難、滅び、飢え、死から救います。男を保護し、弁護し、守り、養います。そして、さらには、神に敵対する悪魔の誘惑から救い出して、男に正しい道を歩ませ、男が罪を犯して神さまのさばきを受けぬよう、むしろ神さまのみこころを行って神の栄光をあらわして生きるよう「助ける」のです。こうして、ありとあらゆる「助け」をもって、男を「助け」ます。そこに男の「助け手」としての女の使命があるのです。このことは、専業主婦、共稼ぎ、関係ありません。専業主婦も共稼ぎの主婦も、例外なく夫の「助け手」です。専業主婦も共稼ぎの主婦も、例外なく夫を「助け」るために造られました。そして、神さまは、夫を助ける能力を妻にお与えになりました。自分が目立って、自分が世間から認められるためではなく、夫を「助け」て、夫が神の栄光をあらわすよう「助ける」ために、神さまは女を造られました。夫は自分の栄光のためではなく、神の栄光のために造られましたが、同様に、妻も、自分の栄光のためではなく、夫の栄光のため、夫が神の栄光をあらわすよう「助ける」ために、造られました。

18. その後、神である主は仰せられた。

「人が、ひとりでいるのは良くない。

わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

ここに集われたみなさんが、神のことばの通りに、神の栄光をあらわす良き家庭を築かれて、家庭のすばらしさを、私たちの子どもたちに伝えていかれるよう、主の御名により祈ります。